

(原審 青森地方裁判所八戸支部 平成13年(わ)第88号、平成13年12月26日判決宣告)

したがって、被告人の犯行当時の責任能力について原判決の事実誤認をいう論旨は、理由が

2 量刑不当の主張について

本件は、高齢で病床にあり意識のなくなった長年連れ添った夫を、同じく高齢の妻である初自らの手で死を迎えさせてやろうとして殺害したという事案である。

被告人が本件犯行に及ぶに至る経過は、原判決がその（犯行に至る経緯）において示すところがあるが、被告人とその夫は、昭和15年以来六十余年にわたり互いに支え合い、温順な夫を気遣う人であったが、被告人が、被告人と円満な結婚生活を続けてきたが、夫は平成7年に脳内出血で倒れて、その夫が、被告人の症状が見られ、被告人が介護に当たっていたところ、平成11年春ころには夫の痴呆の症状が進行し、被告人の介護の負担が増え、同年12月から翌12年2月までは夫がa県b市内のB病院に入院した際には、被告人は毎日病院を訪れて何かと夫の世話をし、退院後は介護施設に通わせなかつたが、被告人自身も心身の持病があり、健康状態が思わしくなかつたため、夫を同年11月から特別養護老人ホームに退院させたものの、その痴呆症は被告人を識別できなくなるほどに進行し、平成13年5月末にはけいこし、同年6月1日には意識を失って一時危篤状態となり、同月29日に上記B病院に入院し、それ以降寝たきりで食事にはできず、点滴や酸素吸入がなされて、刺激に対する反応はあるものの疎通が全くできない状態が続き、被告人は、夫が意識を失って入院して以来、夫の世話は自分だけで、それ以上の信念で自分一人でも夫の面倒を見、ほぼ毎日病院へ通って、かいがよく夫の世話をし、りには夫の死期は近いと思うようになっていた。

このように被告人は、老人性痴呆症の夫を介護し続け、自己の健康状態もよくないにもか
病院入院後もほぼ毎日訪れて夫の身辺の面倒を見ており、死期が近い夫を最後まで自分の手
ければならないとの強い思いから、ひたすら夫の介護に当たってきたのである。そうしたこ
先の病院から転院を勧められて、被告人は、死を間近に控えて夫は病院をたらい回しにされ
じ、そうなれば、夫は安楽どころか苦しい思いをし、同時に自分の手で最後まで世話をす
みならず夫の願いも遂げられなくなると思い込み、目前で同じ病室の隣のベッドにいた老人
運び出されるのを目撃して、その思い込みが一挙に強まり、夫に対する哀れみの感情が高
いっそのこと自分の手で夫に死を迎えさせてやろうと決心し、本件犯行に及んだものである。

なるほど、被告人は、長年連れ添い病気になつてからも懇ろに面倒を見てきた夫の世話は、
 ても自分がしなければならぬ責任感と固い考えを持っておき、意を疎かにした点、
 て酸素吸入によつて呼吸ができなくなり、そのうちに、被告人が狼狽と人一倍の苦痛を覚えたとき、
 分の手では世話が容易なところである。と夫に對する哀れみの感情から、自分の世話を一途に、夫の死期が間
 うこないとなつた一氣に実行したものであるが、例え長年連れ添い夫の世話を客観的に、かみりよ
 なくそれをは許さるものではない。特に、本件では客観的に、かみりよ
 で死期が近いと思はれるものではない。特に、本件では客観的に、かみりよ
 絶つこのたらい回しになるとか、夫の転院が即日実行され、かみりよ
 が病院の上記の主観的感情は、多分に被告人一人の思い過ぎや思ひ込みにより、
 人自分の手で死を迎えさせてやろうとしたのは、被告人の短絡的で独りよ
 自らの得ない。したがって、被告人が夫の命を絶つことを思い立ち、それを
 の動機や経緯には酌量の余地は少ない。

さらに、夫は、被告人が思ったような安楽に死を迎えるのとは全く違う形で突然命を絶たれ
あり、死の迎え方はむしろ残酷とさえいえるのであり、夫の心境は果たして被告人の望んだよ
であったかは疑問である。

以上の理由から、被告人の刑事責任は重いといわざるを得ない。そうすると、被告人が夫を死に致す本件犯行に及ぶについては、当時介護による心身の疲労や動機は、被告当審高子と量あり、老人性に起因するのではなく、夫に対する被控人なりこの愛情の発露の反省の点で、被告述べた原判決の利害にあるものか否かは、80歳を越え、間違った自らの判断において自己の後更には反省を深めておらず、長男は被告人を懲役2年6か月狭心症、大動脈弁狭窄症の疾患を患えており、被告を考慮しても、被告人を懲役2年6か月被告人のために酌むべき事情を考慮して論旨は理由がない。

第3 よって、刑訴法396条により本件控訴を棄却することとして、主文のとおり判決する。

平成14年5月30日

仙台高等裁判所第1刑事部

裁判長裁判官	松	浦	繁
裁判官	根	本	渉
裁判官	春	名	郁子